中国雲南省モンの刺繍から手芸を考える

宮脇千絵（みやわきちえ）
南山大学人類学研究所第一種研究所員・人文学部准教授

従来、モンの女性にとって刺繍（ししゅう）は家事労働の一環であった。しかし、既製の刺繍布が簡単に手に入るようになった今でも、余暇を使って楽しみながら刺繍に勤（いそ）しむ女性がいる。彼女たちにとって刺繍とは。そこに手芸との接点を探る。

20代女性が広東省の出稼ぎ先でおこなった刺繍（中央部分が八角形の花モチーフ）で仕立てたスカート（2015年）

「ほら、これわたしが刺繍したのよ」

そう言って二十代のモン女性が見せてくれたのは、カラフルな糸で八角形の花をかたどった刺繍だった。わたしは彼女が幼いころに刺繍を習ったことがあるのは知っていたが、実際に刺繍したと聞いたのは初めてだった。二〇一五年二月のことである。

出稼ぎ先での刺繍

中国少数民族ミャオ族のうち、主に貴州省西部から雲南省の山地に居住するのがモンと自称する人びとである。雲南省文山（ぶんさん）州のモン女性の衣装は、大麻を素材とする。大麻を栽培し、績（う）み、織る。そこに藍染めやろうけつ染め、刺繍をほどこす。これらの作業は一貫して女性の仕事であった。彼らが主食としているトウモロコシの収穫が終わる秋から旧正月にかけての農閑期が、モンの衣装製作の時期にあたる。旧正月には必ず新しい衣装を準備し、着飾って旧正月三日目から開催される当地のモン最大の祭りに出かける。新しい衣装を着ていないと、お金がないからだとか、衣装製作ができないからだとか、周囲の女性たちから後ろ指を指されることになる。

母親に刺繍を習う姉妹（2007年）

とはいえ、わたしが調査に入った二〇〇七年には染織はほとんどおこなわれていなかった。工業製の化繊布や既製のモン衣装が手軽に入手できるようになっていたからだ。

しかし刺繍は別であった。農閑期には、集まっておしゃべりに興じながら刺繍をする女性たちが見られた。現在でも多くの女性は、幼いころに母親など身近な女性から刺繍を習う。就学すると刺繍をしなくなる人が大半だが、驚いたことに、出稼ぎ先で刺繍をする若い女性たちがいるのだ。

冒頭で紹介した女性も、染織や衣装製作の技術を習得することなく育った。そのため毎年旧正月に新調する衣装は、母親に作ってもらっていた。町の学校に通っていた彼女は、普段洋服を着て過ごす。刺繍をする時間もないし、する必要もなかった。しかし出稼ぎ先では、三交代制の工場勤務の合間に宿舎で刺繍をしていたという。「テレビを見ても面白くないし、遊びに行くには町は遠い。宿舎で話し相手もいなくてひまなときに刺繍していたのよ」と言う。そして旧正月にその刺繍布をもち帰り、母親にスカートに仕立ててもらって着用した。

わたしはそれ以外にも、仕事の合間に刺繍をする若い女性を見ていた。文山州にあるモンの衣装を専門に生産・販売をする服飾工場には、周辺の農村から十代のモン女性たちが働きに来ていた。彼女たちは住み込みで、朝七時半から夜二二時ごろまで働く。長時間、服作りに従事しているにもかかわらず、休憩時間になると刺繍に勤しむ女性がちらほらいた。彼女たちもまた、その刺繍布を使用して新年を迎えるためのスカートを作る。

モン刺繍から手芸を考える

興味深いことは、刺繍が賃労働に対して、余暇におこなう活動としてあらわれてくることだ。従来ならそれは、農作業、家事、育児そして衣装製作という女性が担うべき労働の一環であった。すでに大麻栽培や染織はおこなわれず、女性たちは布作りという「重労働」をしなくてもよくなったことを喜ぶ。市場で既製のモン衣装を購入すれば即着用できる。自作する場合でも、市販の化繊布に機械製刺繍布をミシンで縫い付ければ、短時間で製作できる。労力を費やして布作りをせずとも、新しい衣装を準備できるのだ。

それでも出稼ぎ先で、仕事の合間をぬってわざわざ刺繍をするのはなぜだろうか。ひとつは、その行為自体が女性たちの楽しみとなっているからだろう。染織のように大がかりな道具や空間、まとまった時間が必要なく、一人でどこでもすぐにとりかかれる刺繍は、余暇におこなう活動として最適である。また彼女たちに、なぜ刺繍をするのか？　と尋ねれば、ほとんどの女性が「モンだから」だと答える。市販のもので代替可能であるにもかかわらず、あえて自らの刺繍でスカートを装飾することにモンとしての誇りをもっていることがうかがえる。

モンの刺繍は、女性の賃労働への参入や、代替可能な工業製品の普及によって、失われるどころかかえって、余暇に、楽しみながら、あえて作るものといった手芸らしい様相を見せはじめているのかもしれない。

服飾工場で休憩時間に刺繍をする女性（2007年）